# 私の心に残った本

## 美しいふるまい

「小笠原流礼法入門」
小笠原敬承斎 著
（淡交社）

短期大学講師
（英会話・医療情報英語）
服部しのぶ

日本で日本語を学ぶ外国人留学生が、日本語学習を通して日本人について何か理解を深めることが出来たかという問いに、「相手の気持ちや立場を常に考えながら話すこと」「オ・ア・シ・ス教育」（オ：おはよう、ア：ありがとう、シ：失礼します、ス：すみません）という答を挙げているのを聞いたことがある。これらの項目は、言語学習を通してその言語と密着する文化も理解している良い例といえる。特に、オアシス教育というのはオアシス運動としても知られ、挨拶の励行を呼びかける言葉である。

挨拶をすることは大切だ、ということは一般に認識されていて異を唱える人はいないであろう。とはいうものの、相手の気持ちや立場を考えて挨拶した場合でも、時として、それが相手に伝わらないことがある。そんな体験を繰り返した人は、きっと挨拶する意味を考えてしまうだろう。そこで挨拶の意義について再考してみたい。

そもそも人は完全に自由な存在である。しかし、その完全に自由な人が集まって社会を形成している時、個人の自由は全体の一部分として限界がある。そこで、各個人が限界をなるべく感じないようにするため、すなわち個人の分を守りつつ相手の分も尊重し全体の中で調和を保つために、礼が生まれたのではないだろうか。礼とは、簡単に言えば個人と個人、個人と全体の関係における秩序･調和を保つための形式である。そして挨拶は「挨」も「拶」も共に「迫る」という意味があり、そこから挨拶には相手に近づくという意味がある。挨拶することによってどれだけ相手との距離を縮められるか、ということが挨拶する意義であろう。そこでこの挨拶について、日本と欧米との違いを見てみたい。

まず、日本では、人と会ったら挨拶する。そしてそれができないことは社会人として一般的に問題視される。相手の目を見て「おはようございます」と言葉を発し、お辞儀する。これがごく普通の挨拶である。しかし、あまりよく知らない人に対しては、会釈程度か黙礼で済ませてしまう。このように対象によって挨拶の程度に明らかな差がある。一方、欧米では、私の経験から、誰に対しても声掛けする点が日本式と大きく異なるといえる。例えば、エレベーターで知らない人と乗り合わせても、目が合えばHello.などと微笑と共に言葉を交わす。知人であればそれはもちろん当然で、人によっては手や頬を合わせたりする。何も言葉を交わさないと逆になぜ無視するのかと言われる。

このようにその場所により礼儀の考え方が異なる。日本において、挨拶は礼儀としての意味合いが強く、社会で自分の地位を確立し全体との関係をよりよく保つための方法として位置づけられる。それに対して欧米では、目が合えば敵ではないことを示す意味での言葉がけが作法である。従って、その社会で自分の地位を確立し存在を認められるためには、その社会の礼儀やマナーを身につける必要がある。

しかし、結局、洋の東西を問わず礼儀やそれにあたる作法が存在する。その意味するものは人との関係においていかに相手に迷惑をかけないか、不快な思いをさせないかという相手への思いやりの心であり、このことに変わりはない。相手を大切に思うことこそが礼とマナーの本質で、これがあれば自然にその場にふさわしい振舞いができるものである。そして、どこに行ってもその社会で存在を認められるということであろう。

（当館所蔵　分類番号385）